

義務教育学校「萩野学園」「明倫学園」

— 新庄市「小中一貫教育」の推進 —

学校教育課

1 新庄市の教育

I 学校教育の重点

- ◆ 社会を主体的に生き抜く力を育む学校教育の推進
 - ・ 生きる力を育む学力の育成（学力向上）
「主体的・対話的で深い学び」「ICTを活用した授業（情報活用能力の育成）」
 - ・ 命の尊厳を根底に据えた「こころの教育」
「全教育活動を通した『いのちの教育』の推進」
 - ・ 一人ひとりに寄り添ったきめ細やかな支援の充実（特別支援教育）
- ◆ 地域に根差した学校づくりの推進
 - ・ 「ふるさと新庄」を愛し、誇りに思う子どもの育成
全校において「ふるさと学習」の取り組み
 - ・ 学校、家庭、地域が一体となった教育
 - ・ コミュニティ・スクール【学校運営協議会】※市内全校
- ◆ 安全安心な教育環境の整備
 - ・ 「信頼される学校」をめざす
 - ・ 働き方改革による「子どもと向き合う時間」の確保
 - ・ 学校施設整備（老朽化に伴う計画的改修等）
 - ・ 登下校の安全確保（見守り隊・スクールガードリーダー等の活用）

「小中一貫教育」において実現していく

II 小中一貫教育のあゆみ

平成17年	3月	「新庄市長期教育プランいのち輝く新庄 もみの木教育プラン21」が策定され、小・中一貫教育の導入の検討が始まる。
平成18～19年		「市内5中学校区」に小中連携の在り方の実践研究が委嘱され、小中一貫教育の実践がスタート
「小中連携」から「小中一貫」へ		
平成22年	3月	「新庄市小中一貫教育基本方針」 策定
平成24年	3月	「新庄市小中一貫教育基本計画」 策定
平成26年	3月	「新庄市小中一貫教育推進協議会」 設置
平成27年	4月	「萩野小学校・萩野中学校」（萩野学園） 開校 【現在9年目】
平成28年	4月	学校教育法が改正され義務教育学校「萩野学園」となる
令和3年	4月	義務教育学校「明倫学園」 開校 【現在3年目】
令和5年	8月	「明倫学園」 竣工式

Ⅲ 新庄市小中一貫教育基本方針（平成22年策定）【抜粋】

① 小中学校9年間の一貫カリキュラムを基にした各中学校区で地域と一体となった学校づくりの推進

- 全小中学校における小中一貫教育の実施
市内の5中学校区すべてで小中一貫教育をすすめる。
- 小中一貫教育モデルカリキュラムの作成
中学校区単位の小中一貫カリキュラムを作成する。
- 学校、家庭、地域が一体となった学校づくり
地域に根差した学校づくりに向け、学校、家庭、地域が一体となった取組を進める。
- 命の尊厳を根底に据えた「こころの教育」の推進
異学年交流や地域との協働により、「こころの教育」の充実を図る。
中学校区単位でPTA連絡協議会などの活動を推進する中で、倫理観や規範意識、命を大切に作る心を育てる道徳教育や青少年健全育成のための体験活動などをすすめる、基本的な生活習慣の確立や人間関係力の育成を図り、新庄市がすすめてきた、命の尊厳を根底に据えた「こころの教育」の充実に努める。

② 義務教育9年間における「4－3－2」の教育システム

義務教育9年間を前期、中期、後期に区分し、特に変化の激しい中期の指導の充実を図る。小中学校9年間を前期4年、中期3年、後期2年に区分し、発達段階に応じてそれぞれの時期で重視して指導することを明確にして取り組む。

学年									
	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	7 年	8 年	9 年
特色	9 年間の一貫教科カリキュラムによる指導								
区分	4－3－2 ブロック制による教育区分								
指導体制	前期		学級担任制		中期 教科担任制		後期 教科教室制		
重点	基礎充実期 繰り返しの指導や補充指導による 習熟を重視。基礎的・基本的な知識・ 技能の定着を図る。				活用期 活用を重視。思考力・表現力を育成。教科担任制、 一部教科担任制の実施。小中教員の交流授業等 による専門的な指導やT・Tで、学習への興味・関心 を高める。			発展期 夢の実現、進路目標の達成に向けた発展的な学習の展開。 課題の発見力、総合的な問題解決能力を育成する。	
					部活動体験 (6年)			部活動 (6年生3学期から)	
部活動									

③ 小中学校の児童生徒、教職員の交流推進

それぞれの中学校区の実態に応じて、小学生と中学生とが一緒に学習したり、活動したりする。また、学校行事などの機会に交流する。

また、教職員の負担も考慮しながら、小学校と中学校の教職員が一緒にT・T授業（一つの授業に複数の教師がかかわることで、個に応じたきめ細かい指導を行うことをねらいとした授業形態）を行ったり、小学校高学年では、中学校の教職員が専門性を活かして小学校の授業を担当する教科担任制を実態に応じてすすめる。また、小中の教員が互いの指導方法を磨き合う研修会も積極的に設定する。

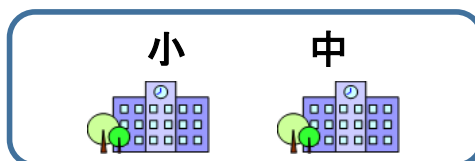
④ 小中一貫教育を推進する3つの型

各中学校区における小中連携を「単線連携型」「複線連携型」「施設一体型」の3つの型において推進する。

小中一貫3つの型

① 単線連携型

新庄小学校 — 新庄中学校
日新小学校 — 日新中学校



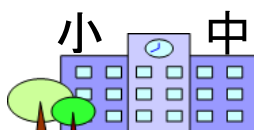
② 複線連携型

本合海小学校 — 八向中学校
升形小学校



③ 施設一体型

萩野学園 ・ 明倫学園



2 義務教育学校

I 義務教育学校（平成28年学校教育法改正）

「1人の校長と1つの教職員組織のもと、9年間の教育目標を設定し、9年間の系統性を確保した教育課程を編成する学校」

平成28年の制度化により、全国22校で始まった。（萩野学園含）その後数を増やし、令和4年度時点で178校となった。

【萩野学園9年目・明倫学園3年目(今年度竣工式)】

【義務教育学校の設置の意義】

義務教育学校は、修業年限が9年間であり、1年生から9年生までが同じ学校の中で生活を送る。心身の発達を考慮した連続性を確保し、教育課程を9年間の継続的なものとして編成・実施することにより、今まで課題とされてきた「中一ギャップ」の解消や、9年間の縦のつながりの中で社会性を育てていく。

また、「いのちの尊厳を根底に据えた心の教育」を9年間の継続した取り組みにしていくうえで「義務教育学校」として設置することに大きな意義がある。

＜新庄市における義務教育学校カリキュラム＞

「4－3－2ブロック制」	
前期ブロック	1年生～4年生
中期ブロック	5年生～7年生
後期ブロック	8年生～9年生
※ 各ブロックのリーダーは 「4年生」「7年生」「9年生」	

学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年
特色	9年間の一貫教科カリキュラムによる指導								
区分	4－3－2ブロック制による教育区分								
指導体制	前期			中期 教科担任制			後期 教科兼任制		
重点	基礎充実期 繰り返しの指導や補充指導による習熟を重視。基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る。			活用期 活用を重視。思考力・表現力を育成。教科担任制、一部教科担任制の実施。小中教員の交流授業等による専門的な指導やTで、学習への興味・関心を高める。			発展期 夢の実現、進路目標の達成に向けた発展的な学習の展開。課題の発見力、総合的な問題解決能力を育成する。		
部活動				部活動体験（6年）			部活動（6年生3学期から）		

「なぜ義務教育学校（前・中・後期ブロック制）か？」

＜発達の変化＞

学校教育法 義務教育6－3制は 昭和22年

当時より発達が2年はやい（身長・体重、生理的成熟の早期化）思春期到来
生徒指導上の配慮

→ 今の時代に合わせていく必要がある

「小学校5・6年生を中学生のステージへ」

Ⅱ 義務教育学校に期待されること

新庄市が進める小中一貫教育では、義務教育9年間を教職員の共通理解に立った、計画的・継続的な指導を行うことを目指している。そのことにより次のような効果が期待されると考えられる。

- ① 子どもたち一人ひとりの興味や関心に基づいたきめ細かな指導が可能となり、個性や能力を伸ばすことができる。
- ② 9年間のスパンで、学校の特色に応じた創意工夫のある活動が展開できる。
- ③ 異年齢集団の交流を通して、豊かな人間性や社会性を育てることができる。
- ④ 様々な生徒指導上の課題に的確かつ迅速に対応できる。

【児童生徒】

① 9年間でリーダーを3回経験できる。

前期ブロック（4年生）・中期ブロック（7年生）・後期ブロック（9年生）

※ 8年生（中学2年）において、生徒会活動を3年生から引き継ぎ、生徒会運営を行っていくことから、8年生においてもリーダー経験ができる。

9年間でリーダー経験を4回できると考えられる。

② 異年齢の交流で豊かな人間性と社会性を育む。

全校（1から9年生）や各ブロックにおいて、学年を超えた交流活動が日常において可能になる。

③ 前・中期段階から一部教科担任制を導入し、専門的な授業を受けることができる。

【教職員】

① 小中の垣根をなくし、義務教育学校の教員として9年間を見通した教育活動を展開できる。学力向上に向けた「授業改善」を全教員で9年間を貫いた検討ができる。生徒指導において、全職員による9年間を通した子ども理解ができる。

② 小学校教員と中学校教員間で、乗り入れによる教科指導が可能。主に中学校教員が小学校（前期）課程（6年生以下）へ、専門的に教科指導を行うことができる。

③ 5教科（国・社・数・理・英）の教科教室を設置し、後期ブロックの生徒が主に使用している。各教科専門の教室で学ぶことで、教科意識を深めながら学習することができる。

Ⅲ 義務教育学校の「成果と課題」

【萩野学園6年間の検証及び毎年の定期調査より】

※「児童・生徒・保護者・教職員へのアンケート調査結果」「毎年の定期調査」

1年生から9年生まで毎日一緒に過ごすことについて

【成果】

① 自己肯定感が高くなっている。

② 上の学年がやさしくなっている。下の学年は、上の学年にあこがれの気持ちをも

ち、上の学年を目標としている。

- ③ 思いやりの心が育ってる。児童生徒の人間関係がよい。
- ④ 生徒指導上の問題行動が減少した。(中学校課程)
- ⑤ 社会のルールを守る。安全に生活するなど、自律の心が育っている。

義務教育学校の特色について

【成果】

- ① 不登校が減少している。「安心して登校」
- ② 学力が向上している。小中の教員が共に授業研究に臨んでいる効果が出ている。
前期課程（小学校課程）の教科担任制、後期課程（中学課程）から前期課程への乗り入れ授業等の成果がある。教員文化の違いを乗り越えて、授業観や評価観の差が縮小している。
- ③ 後期のブロックの教科教室制により、教科の専門性を高めた授業が行われている。
- ④ 児童生徒理解が深まり、寄り添って指導ができています。いろいろな教職員がかかわり対応している。9年間の継続した関わり。
- ⑤ 「中1ギャップ」が見られない。いじめ、不登校の大幅な減少が見られる。
⇒ なぜ義務教育学校において激減するのか？
他の中学校における大きなヒントになる。

【課題】

- ① 中期ブロックの位置づけを具体的に検討する必要がある。
- ② 中期ブロック7年生のリーダー性の育成
- ③ 教職員の配置（特に中期ブロック）
- ④ 6－3制からの脱却
- ⑤ 中学生の問題の小学生への影響

<校長の見解>

「課題」は、規模的な部分で挙げられることはあるが、義務教育学校としては、多少の課題も「成果」と前向きに捉え、取り組んでいる。

Ⅳ 令和5年度 新庄市立萩野学園 公開授業研究会【R5.10.6】より

<義務教育学校としての授業実践>

① 中学教員の乗り入れ授業【5年算数】

後期課程（中学校）教員が前期課程（小学校課程）の授業に乗り入れ、小学校教諭とT・T指導を行うことで、より専門的な深い学びにつながる指導を行った。

② 6年生と7年生の交流授業【6・7年学活】

6年生と7年生が交流することで、自らの生活や考え方を、具体的なアドバイスや実際の姿から見直すことができた。

③ 家庭学習と授業の課題をつなぐ連携【2年道徳、4年算数】

児童生徒の意欲を高めるとともに、本質的な課題について思考する時間を確保した。

④ 発達段階に応じた ICT の効果的な活用【2年道徳、8年英語、9年社会】

低学年はタブレットでアンケート回答、後期課程はデジタル教科書によるリスニング、レポート作成等を行った。

⑤ 児童生徒による主体的な学びを目指した授業【9年社会】

学習方法や進め方を生徒自身が選択できるようにし、教師主導による一斉指導から抜け出し、児童生徒による主体的な学びを目指した。

<公開研究会参加者の声>

1 萩野学園の研究について

- 9年生までが同じ目標に向かって学んでいる姿は、義務教育学校ならではのであり、つけたい力が明確で異学年交流、教科担任制など、義務教育学校ならではの研究がなされていて大変よかった。
- ICTの積極的な活用、段階的な自学の取り組みなど、自校でも取り組めたらと思う点が多々あった。
- 小6のとき、リーダーとして活躍できないのはどうかと思っていたが、4回リーダーを体験できるとわかり、すばらしいと思った。
- 「探究」とは、具体的にどのように学習を進める事なのか、また、ゴールの姿や、その過程の道筋などを子ども達が理解していることで、学びは深まっていくところを改めて確認することができた。
- 授業はもちろん、家庭学習との連携についてもたいへん勉強になった。自分で学ぶ力を身につけていくことの大切さを感じた。
- ▲ 家庭学習は各家庭の教育方針ではないのか。家庭学習を考えずに授業のみでどう主体的に必要性をもって学ばせるかを研究するべきではないかと感じた。

2 授業について

- 授業の中に子どもたちが選択する場面、子どもたちが委ねられている場面がたくさんあり、主体性を育む手立てとしてとても有効であった。
- 1年生に合わせた読みの深め方、叙述へのこだわり、魅力的な言語活動について学ばせていただいた。
- ICTを活用し、事前に資料を読んでおくことで学び合いにたっぷり時間がとれていてよかった。
- 日常を課題にした学習で、家庭学習も生かして授業につなぐことが有効だと感じた。
- 事前に家庭で問題について考えてくることで、授業にゆとりができ、児童の意欲も高まることがよくわかった。
- 普段から学び合っている姿が伝わってくるような温かい雰囲気がとても素敵だと思った。日々の積み重ねの大切さを改めて実感した。
- 教科や児童の発言をていねいに扱い、日々の授業や子ども一人一人を大切にしていることが伝わってくる授業だった。もう少し子どもに任せて対話を活性化させてもよいかと感じた。

- 質の高い学びへ向かうために、日々の教材研究や授業のリフレクションを大切にしていきたい。
- 子ども達の家庭学習の計画を支援するプレスタシートや子ども達に現状の問題を知らせて、問題意識を持たせる所に教師の支援の工夫があると感じた。先生たちの声がけでも、計画を立てたり、振り返りを書くなどの考えに対して、具体的にはどのようにするのか質問をしていて、教えるのではなく子どもの主体性を支える働きかけをしていると感じた。
- ▲ 多様な考えに触れさせるという点では、一つの方法で解決した後、何もしない児童もいた。一つの方法を考えたら、他の方法でも考えることが身についていると思の広がり、深まりが出てくると感じた。
- ▲ 多様な考えに触れさせるためにも、より多くの考えを取り上げる必要があるが、教師のコーディネート仕方には課題がある。指導の中にもあったように、T2と役割分担をしたり、グループで考えている時に俯瞰して見たりしながら、コーディネートしていくことの大切さを改めて実感した。

V 義務教育学校の現状とこれから

新庄市に義務教育学校が開校し、9年目を迎えたいま、県内外から多くの団体が視察に訪れている。県内で見ると今年度現在、本市と戸沢村に義務教育学校が設置されているが、今後義務教育学校の開校を目指している自治体は、県内各地域にある。本市が、先進校として注目されるなか、現状を評価し、これからの義務教育学校の在り方を検討していくことは使命とも言えよう。

【現状とこれから】

- ① 中一ギャップが解消されている現状にある。児童生徒自身が将来の学校生活を見通し、安心して次の段階へと進級している。この「将来を見通す安心感」は、他の小中学校が抱える中一ギャップ解消のヒントである。小中連携を「子どもの視点に立った」意味のある効果的なものにしていかなければならない。
- ② 義務教育学校開校当初の数年間、学力の向上が見ることができた。開校前に小中学校の教員が合同で研修し、カリキュラムをつくり、授業の準備をしてきた賜物であった。現在、異動により義務教育学校を初めて経験する教員が、毎年増えている。今後も小中の垣根をなくし、学力向上に向けた授業研究を進めていかなければならない。
- ③ 中学校教員の前期課程（小学校課程）への乗り入れなど、義務教育学校の特色をいかした取り組みを進めていきたいところだが、少子化に伴う児童生徒数の減少、教職員定数の減少により、実施できない現状にある。義務教育学校として大きな問題である。
- ④ 萩野学園が開校から9年目を迎え、今年度、開校年度に入学した児童が卒業を迎える。この一義務教育期間を区切りに、10年目を迎える来年度「成果検証」を行う予定である。児童生徒・保護者・地域・教職員等におけるアンケート等を行い、評価する。明倫学園においては、開校5年を目途に検証を行う予定。